

査読付論文

中国の「八十年代」と「新啓蒙」運動

——王元化の思想と『新啓蒙』叢書の志——

村上道子*

要 旨

中国の「八十年代」は、10年に及んだ「文化大革命」の残滓を清算しながら、一方では「文革」的なるものを復活させつつ、手探りで「改革開放」を進めた時代だった。78年12月の11期三中全会で党の主導権を握った鄧小平は、経済最優先で改革を進め、政治の改革は遅々として進まず、一方で「思想の解放」によって活気づいた思想界の言論に対しては、「ブルジョア自由化反対」の名の下に弾圧を繰り返してきた。「真理基準討論」が先鞭をつけた思想解放運動は、度重なる弾圧にも拘らず、反文革・反封建・反伝統・文化論議等と主題を変えながら、「八十年代」を通して粘り強く展開されてきた。思想史の上でこの「八十年代」の思想解放運動を「新啓蒙」運動と呼んでいる。この「新啓蒙」運動の掉尾を飾ったのが、88年10月から89年4月まで刊行された『新啓蒙』叢書である。

「新啓蒙」運動は、1989年6月の第二次天安門事件による言論弾圧以後、ほとんど壊滅状態に陥ってしまう。そして90年代以降中国の思想界は大きく変化し、現在では「八十年代」の新啓蒙思潮に対して否定的な論調が有力になりつつあるという。とくに、執筆者として改革開放初期に活躍した胡耀邦周辺の党内民主派を多く擁した『新啓蒙』叢書は、意図的に無視或いは低く評価されている傾向がある。そこで本論文では、「八十年代」啓蒙運動の意義を再確認し、『新啓蒙』叢書の主編者である王元化の思想をたどり、『新啓蒙』叢書刊行の志を解明することを通して「八十年代」啓蒙思潮の一端を明らかにする。

目 次

はじめに

I. 「八十年代」思潮と『新啓蒙』叢書

1. 「八十年代」思想史研究の現在
2. 「八十年代」思潮の三時期と『新啓蒙』叢書創刊の背景

II. 『新啓蒙』叢書

1. 王元化の経歴と思想
 - (1) キリスト教精神
 - (2) 極左思潮下、党の文芸部門で働く
 - (3) 苦難の中での読書と執筆
 - (4) 「反思」を通して自分の思想を客観視
 - (5) 独立の人格、独立の見解

2. 『新啓蒙』叢書の志

- (1) 権勢に屈せず、世に媚びず
- (2) 埋れた中から光輝く文章を発掘

おわりに

はじめに

中国の現代史は、1949年の建国以来ほぼ10年ごとに、特有の相貌をもって人々に記憶されている。その代表が60～70年代の「プロレタリア文化大革命」期であり、その後の「八十年代」である。「中国の八十年代」というとき、「八十年代」という言葉には記号的な意味が込められているという。それは、暦の上での1980年から1989年までを指すわけではなく、プロレタリア文化大革命（以下、文革と略称）終焉後の70年代末から89年

* むらかみ みちこ 文学研究科中国言語文化専攻博士課程後期課程
2016年10月5日 査読審査終了

までの10年余りを指し、「ポスト文革」としての特殊な一時期を意味する。これは、ちょうど「五四」という言葉が1919年5月4日だけを指すわけではないことと同様だという¹⁾。

建国以来「文革」に至るまで、「大躍進」失敗後の一時期を除いて、中国は毛沢東の天下であった。政治的に毛沢東によって率いられてきただけでなく、一般の人々の考え方や心情、行動様式等までもが毛沢東思想によってコントロールされてきた²⁾。その極点が「文革」の時代であり、人々は毛沢東を崇拜し、毛沢東こそ真理であるとして生きてきた。1978年5月に発表された論文「真理を検証する唯一の基準は実践である」は、このような毛沢東の呪縛を解き放ち、「实事求是」の精神でものごとを考える「思想の解放」を人々に訴えた。この論文から始まった「真理基準論争」を契機に、毛沢東に依拠して主導権を維持しようとする華国鋒らの「すべて派」³⁾は敗退し、78年12月の11期三中全会から鄧小平の主導権が確立、「改革開放路線」が始まった。

改革開放政策によって経済改革はかなり進んだが、政治改革については何回か議論され試案も提起されたが、ほとんど実行に移されることはなかった。一方、「思想の解放」の呼びかけに触発され、78年夏には「西単の民主の壁」と言われる「文革」後初の民主化運動が起こった。しかし鄧小平は主導権を握ると、党内保守派を利用しながら民主化運動を弾圧、79年3月には「四つの基本原則」を発表して「毛沢東思想の堅持」を政治体制の原則の一つとした。こうして毛沢東思想を復活させながら、党内外の民主化への動きに対しては「ブルジョア自由化反対」という名の下に弾圧を繰り返した。周揚と王若水の「ヒューマニズム及び疎外論」に対する批判から始まった83年の「反精神汚染」、胡耀邦左脚の引き金になった86年末の学生運動の弾圧や方励之・王若望らの除名などがその代表である。

しかしひとたび「思想の解放」という洗礼を受

けた人々は、もはや文革期までのようなイデオロギー攻勢に簡単に怯むことはなくなっていた。ときには「信念の危機」⁴⁾に直面した人々に、「ポスト文革」期におけるものの見方や考え方の指針を示し、ときには欧米の多様な思想や考え方を紹介したり、伝統思想の再検討を訴えたりする多様な文化運動が展開された。これが「八十年代」の「新啓蒙」とよばれる思想運動である。「新啓蒙」は「五四」の「旧啓蒙」を継承し、さらに深化させるというねらいをもっていた⁵⁾。「新啓蒙」思潮は後述するように、「八十年代」の時期によって様々な展開をみせるが、「八十年代」末期の1988年から1989年にかけて刊行されたのが、『新啓蒙』叢書である。

『新啓蒙』叢書は、王元化を主編者として湖南教育出版社から出版された。編集・執筆陣には王若水・阮銘・李洪林等の改革開放初期に胡耀邦周辺で活躍した党内理論家、韋政通・金観涛等の学者、高爾泰・邵燕祥等の芸術家、戈揚・胡績偉等のジャーナリスト、さらに劉曉波・許紀霖等の若手研究者など、幅広い世代と様々な分野の人々が名を連ねている。論じられたテーマは、「新啓蒙」論、人道主義や疎外の問題、改革開放には思想の解放が重要なこと、中国の伝統文化と西欧の文化等、多岐にわたり、「時事評論でもなければ純粹に学術的なものでもなく、文化的に高いレベルから人々が関心をもつ現実的意義のある問題を検討した」⁶⁾という。隔月刊で、第1号「時代と選択」1988年10月、第2号「危機と改革」同年12月、第3号「論異化概念」1989年2月、第4号「廬山会議教訓」同年4月、の4号まで刊行された。各号の標題は、当該誌の中の一編の論文名から付けられている。なお、第6号まで校正が終わっていたが、天安門事件後の停刊命令によって出版できなくなったという。判型は32開（日本のA5判よりやや小さい）、100頁前後という小さな叢書であったが、改革開放の進展に伴って社会全体に商業主義が蔓延し、一方では思想の弾圧が繰

り返される中、改革開放初期の理念を喚起するかのよう、思想の解放（啓蒙）の重要性を訴えた。

このように、天安門事件後の思想弾圧により4号までしか刊行されなかったが、『新啓蒙』叢書は「八十年代に人々の注目を集めたメルクマールの文化思想的事件であった」⁷⁾という。にも拘らず、現在「八十年代」の啓蒙思潮を取り上げた本を見てみると、『新啓蒙』叢書について詳しく論じているものは極めて少ない⁸⁾。そこには90年代以後の中国社会の激変と、それに伴う思想界・知識界の「八十年代」思想評価の問題が存在する。その点を踏まえながら本論文では、主編者王元化の思想と叢書刊行の志に焦点を絞って、『新啓蒙』叢書の特徴を明らかにしていく。

I. 「八十年代」思潮と『新啓蒙』叢書

1. 「八十年代」思想史研究の現在

21世紀も10年代半ばの今日、中国の「八十年代」を研究することにはどのような意味があるのだろうか。中国における「八十年代」思想史研究の現状を調べてみると、非常にやっかいな問題がからんでいることがわかる。それは、1989年の第二次天安門事件後の90年代から中国の政治や社会の状況が大きく変化し、その影響を受けた思想文化界の80年代評価の問題である。歴史学者の王学典はこう書いている。「『八十年代』は今まさに『現実』から『歴史』に入ろうとしている。『八十年代』が将来人々の前にどのような顔で立ち現れ、どのような性質の『歴史』になるかは、かなり現在の言説如何にかかっている。今まさに多くの人たちが『八十年代』の争奪をしており、『八十年代』の著作競争が繰り広げられているようである」⁹⁾。

試みに中国で出版されている「八十年代」思想史に関わる本を読み比べてみると、その記述の違いに驚かされる。ここで代表的な例として、許紀霖・羅崗等著『啓蒙的自我瓦解 1990年代以来中

国思想文化界重大論争研究』（吉林出版集团有限责任公司，2007年）と王学典『思想史上的新啓蒙時代 黎澍及其探索の問題』（河南人民出版社，2010年）とを、「新啓蒙」の記述に関して簡単に比較しておきたい（以下前者を『自我瓦解』、後者を『新啓蒙時代』と略称する）¹⁰⁾。

許紀霖『自我瓦解』は、「思想解放運動が主に政治改革を訴えていたとするなら、新啓蒙運動は所謂『文化の現代化』に移った」とし、思想解放運動（政治）と新啓蒙運動（文化）とを二つに分けて考えている。そして「思想解放運動は体制内部の運動であったため、たとえ人道主義的マルクス主義であったとしても、国家イデオロギーの周辺で語られ、新しい思想空間と社会空間を生み出さなかった。これは周揚等が体制内の身分と知識を背景にしていたことによる」とし、一方の新啓蒙運動は「文化を語りながら政治イデオロギー体制と知識の専門学科体制から抜け出て、民間に新しい思想空間を切り開き、文化の自主性と精神の公共性を獲得した」という¹¹⁾。そして、所謂「文化ブーム」を齎した雑誌の発刊や団体の創立の年（1984～85年）を新啓蒙運動の発端であるとしている¹²⁾。

一方王学典『新啓蒙時代』は、「『啓蒙』は、『文化ブーム』の代名詞だとか、1984年或いは1985年に始まったというような、『八十年代』のある時期だけの性質ではなく、『八十年代』を通しての基本的属性である」という。そして「『文革』が典型的な『封建蒙昧主義』運動であったというのは、『文革』終焉直後に学術理論界が形成した共通認識の一つであり」、「新啓蒙」という言葉は「文革」期の「新蒙昧」に対する言葉であるとして、「文革」期の「新蒙昧」を覆すすべての営為を啓蒙であるという。「『法家』学説も『儒家』学説もともに『封建主義理論』である、というのも『啓蒙』である。『実践は真理検証の唯一の基準である』と考え、そこから『毛沢東の是非の判断を是非の判断とする』という蒙昧な観念が

終わった、というのも『啓蒙』である。『人間の価値』『人間の解放』『人間の個性』を基本的な価値とし、そこからまぼろしの『集団』への盲目的な従属が終わった、というのも『啓蒙』である。当時の人々は、これらをみな啓蒙と見做していた¹³⁾。

この二著の記述を比べてまず気づくのは、「文革」への言及の仕方の違いと、「新啓蒙運動」期間の認定の違いである。王が「新啓蒙」を文革期の「新蒙昧」に対するものとして位置づけ、文革（新蒙昧）の反省に始まる「八十年代」全体を「新啓蒙運動」の時代としているのに対し、許は「文革」と「新啓蒙」との関連については言及せず、「八十年代」前半は「体制内部の思想解放運動」（政治）として「新啓蒙運動」に入れず、「八十年代」半ば以降の「文化ブーム」から「新啓蒙運動」（文化）の期間としている。

「文革」への言及のほかに特徴的なことは、許『自我瓦解』の「新啓蒙観」における体制と民間との対比である。ことに「思想解放運動」は体制側で行われたために新しい「思想空間」を切り開かなかったというのは、「真理基準論争」に始まる70年代末から80年代初めにかけての党内改革派主導による所謂「上からの思想解放」が、「西単の民主の壁」と呼ばれる運動に象徴される民衆の民主化への覚醒を引き起こした（まさに「啓蒙」である）ことなどを一切評価していない。許が「新啓蒙」を「八十年代」半ばの「文化ブーム」から始まるとし、それ以前の「思想解放運動」を評価しないのは、第二次天安門事件後の政治的思想的情况と関係があると思われる。70年代末から80年代前半にかけて思想解放（啓蒙）のために活躍した人々の中心は、87年に失脚し89年に亡くなった胡耀邦周辺にいた党内理論家たちであった。そしてこの人たちの多くは、83年の「反精神汚染」、87年の「反ブルジョア自由化」等により、次々と表舞台から消えていった。そして胡耀邦追悼に始まる第二次天安門事件の勃発である。

「八十年代」の思想解放（啓蒙）を語る上で欠かすことのできない胡耀邦周辺の党内理論家たちは、こうして政治的に葬りさらされただけでなく、思想史的な役割も無視（せいぜい低評価）されることになった。許の、体制内の思想解放運動への低評価はこのような動きと連動している。しかもこれは、王学典によれば現在の学界の主流の考え方だという。

「八十年代」後半の社会思潮に影響を与えたのは、三大叢書編集委員会ではなく、四大叢書編集委員会であり¹⁴⁾、しかも四大叢書についていえば、その影響力と地位は一様ではなく、許紀霖には見落とされているが、その中で最も重要な叢書が『新啓蒙』叢書』及びその編集委員会なのである。許氏は必ずしも故意に見落としたわけではない。これは実際、「新啓蒙」思潮と「八十年代」の時代の主題及びその基本的価値の評価等一連の問題に関係している。まさにこれらの問題についての認識が分かれているために、「八十年代」に対する認識の上で多くの盲点が存在してしまっている。さらに、あの一群の「党内理論家」の、「八十年代」思想文化界における影響力と地位を、あらゆる手を尽くして低く評価するというのも、最近十数年來のいわゆる学界主流が作り上げた主流の傾向である。「八十年代」の時代の主題に対する理解の上での偏向が、すなわちこのような低評価の出現を齎した認識論の根源である¹⁵⁾。

かつての「党内理論家」たちの役割が不当に低い評価を受けていることは、じつは本論文の主題である『新啓蒙』叢書の評価と関係がある。上述のように、『新啓蒙』叢書の編者や執筆者の中には、王若水・李洪林・阮銘等、胡耀邦周辺の党内理論家が多かったのである。従って、「党内理論家」が中核メンバーだった『新啓蒙』叢書も軽視

する、という構造になっている。「八十年代」の主要な思想潮流としてしばしば「三大叢書編集委員会」が挙げられ、『新啓蒙』叢書はその中に入れられていないことが多いが、その理由の一端も、上の引用で明らかであろう。

ここでは許紀霖と王学典の「新啓蒙」運動観の一部を紹介したが、実は、王は90年代以降に書かれた「八十年代」思潮に関する著作をいくつか検討し、「『八十年代』思潮について、歴史の改竄が行われており、一部はそれが公認されてしまっている」とまで書いている¹⁶⁾。そして、後世の価値観で過去の歴史の事実を断罪、歪曲してしまうことの危険性を厳しく批判している¹⁷⁾。

このように、中国における「八十年代」思想史研究は現在、90年代以降の政治的情况を反映しながら、かなり歪められた形で進行しているようである。そうであるならば、私たちは「八十年代」に書かれた資料や「八十年代」に生きた当事者の言葉を通して当時の状況を再現してみるほかないだろう。

2. 「八十年代」思潮の三時期と『新啓蒙』叢書創刊の背景

そこでまず、「八十年代」全般の思潮を概観し、1988年10月の『新啓蒙』叢書創刊に至る時代情況を押さえることにする。「八十年代」の啓蒙思潮を論じている著作はかなりあるようだが、王学典ほど「文革」との関連に拘って論じているものは少ないようである。「八十年代」を「ポスト文革」と規定し、「文革の清算」から「新啓蒙」が始まるという所論は、筆者には強い説得力があると思われる。そこで、王学典の「新啓蒙」論に依拠しながら、「八十年代」の思潮を概観する。

王は「八十年代」思潮を次のような三つの時期に分けている¹⁸⁾。

- (1) 「文革」終焉から1983年「反精神汚染」まで「真理基準問題」討論の展開 (1978)、「理

論検討会議」の招集 (1979)、「若干の歴史問題決議」の起草と討論 (1981)、疎外・人道主義の主張 (1983) 等、文革後のイデオロギーの変革が党主導で進められた時期。胡耀邦の下で周揚・于光遠・黎澍・王若水等の「党内理論家」が活躍した。主題は「反文革」「撥乱反正」「思想解放」「反封建」。

- (2) 1984年から1986年の年末 (胡耀邦失脚) まで「反精神汚染」(1983) で党内理論家が打撃を受けた後、李沢厚・龐朴らの「思想文化界」が勃興し、青年知識人たちも頭角を現わす。主題は「文化ブーム」「反伝統」。

- (3) 1987年春から1989年初夏 (第二次天安門事件) まで

文化界は「急進」の頂点に向かい、伝統文化に対して比較的穏健な李沢厚と龐朴は時代遅れ、或いは批判の対象となり、大学生や大学院生が運動の主力となった。『文化：中国与世界』編集委員会と『走向未来叢書』編集委員会の青年学者グループも「全面的な西欧化」のために波瀾を巻き起こし氣勢をあげた。この時期一世を風靡したのは、激烈な反伝統の劉曉波とテレビ・ドキュメンタリー『河殤』であった。

この時期区分では(3)の時期にあたる1988年10月に、『新啓蒙』叢書が創刊された。この年は改革開放10周年にあたり、言論界がかなり活気づいた年であった。すでに胡耀邦が失脚する前の1986年から、政治改革を主張する知識人たちによる公開討論会が催されるようになり、民主化に関する民間の討論ブームが起こっていた。そして1988年には様々な記念集会や討論会が行われた。例えば4月には「五四運動69周年記念」と銘打った「文化発展問題討論会」、5月には「実践は真理を検証する唯一の基準」論文10周年記念集会が開かれている。またいわゆる「球籍危機」に関する討論も提起され¹⁹⁾、知識界に一種の危機意識が醸成され

ていった。そして1988年の思想界で一大ブームとなったのが、6月に放映されたテレビ・ドキュメンタリー『河殤』であった。これは黄河に象徴される中華文明を否定、西欧文明の全面的摂取を訴え、改革の徹底的推進を呼びかけており、賛否両論にわたる熱狂的反響を巻き起こした²⁰⁾。このような理論界・知識界の活気は、翌1989年に入ると、1月の方励之による魏京生釈放を求める鄧小平への手紙を皮切りに、2月からは数度にわたる知識人や科学者たちの公開書簡運動へと発展、やがて4月から6月の天安門広場における学生・市民たちの大規模な民主化運動へと広がっていくことになる。

一方、1988年の秋ごろから経済は過熱し、インフレは激化、鄧小平は改革の断行をあきらめ、李鵬ら保守派に命じ、経済改革に急激なブレーキをかけた。つまり計画的な手法による経済管理の強化と財政金融の引き締めを行ない、中国社会は物価の上昇と景気の低迷が併存する状態に陥っていた。学生や知識人たちは政治改革の停滞に強い不満を感じており、とくに二重価格制を悪用し、統制価格の安い品物を買ひ、市場価格で売って儲けるブローカー行為（官倒）に批判が集中していた。

II. 『新啓蒙』叢書

1. 王元化の経歴と思想

このような、改革の停滞と活気ある理論界という複雑な状況下に、『新啓蒙』叢書は刊行された。主編者は王元化である。彼は主編者一人だけの名前を公表することについて、弟子の呉琦幸に次のように語っている。

今回、編集委員会を組織したが、この編集委員会のメンバーを誌上に公開するつもりはなく、主編者一人だけの名前を載せ、ほかには湖南教育出版社の編集責任者の名前を載せる。現在、言論が開放されているとはいえ、

多くの複雑な問題がある。中国の事情は簡単に考えてはいけないのだ²¹⁾。

また、別のところで名前を公開しないのは「みんなを守るためだ」とも言っている²²⁾。「みんなを守るため」という「みんな」とは、叢書の中心メンバーであるかつて胡耀邦周辺で活動した党内理論家たちであろう。「言論が開放されているとはいえ、多くの複雑な問題がある」、中国では、よくよく考えてことを進めなければいけない、これは、心を許した弟子に語っている言葉である。王元化がこのように語る背景には、それまで彼が歩んできた道と現状への洞察が関係していると思われる。そこで、以下に王元化（1920～2008）の、80年代末までの経歴と思想について触れておきたい²³⁾。

(1) キリスト教精神

王元化は1920年、湖北省武昌のキリスト教を信仰する知識人の家庭に生まれた。母方の祖父桂美鵬は、沙市の聖公会で最初の中国人牧師で、長江一帯の宣教の責任者であった。そして沙市の聖公会は当時、孫中山たちの革命を支持する基地の一つであった。母方の一族は当時最も早くに欧化教育を受けた新しい知識人の家庭であった。王元化のおじやおばたちの中にはアメリカに留学して博士号をとったり、ヨーロッパで学び、帰国後聖ヨハネ大学等で外国文学を講じたりしている者もいる。この母方の文化的な血統が王元化にかなり大きな影響を与えたという。王元化の父は、家が貧しく教会の援助で学業を続け、母とは教会で結婚式を挙げている。王元化はこのような、当時としては珍しい西洋的キリスト教的教養の知識人家庭で育った。成長期に受けたキリスト教の影響について、王元化は後に次のように語っている。

クリスチャン家庭の影響として、二つ重要な点がある。一つは、人はみな欠点があるということだ。（中略）キリスト教には原罪説が

あり、人はだれでも生まれながらに罪を負っているという。(中略)まさにこのために人の欠点を了承し、寛大な態度を取ることができ、悪を仇のように憎まなければならないということがない。二つめとして、キリスト教が我々に与えた長所は、人が比較的謙虚になれ、神と同じようになれるとは思わないことである。だから私は若い頃から、領袖に対して崇拜するような気持ちを持ったことはない。私は魯迅をいささか崇拜しているが、偶像というほどではない。文学芸術工作者代表大会で北京に行って初めて毛沢東に会った時、多くの人たちは敬虔な、そしてひれ伏すような感じだったが、私自身はそういう気持ちはなく、ただ内心いささか恐縮するような気持ちがあった。これは多分、キリスト教と関係があるだろう。神の前では人はみな平等だからである²⁴⁾。

これは、文革期に猖獗を極めた毛沢東に対する個人崇拜を考えると、大変興味深い言葉である。「神の前ではみな平等」という観念が、たとえば日本の封建時代の支配者に危惧を抱かせキリシタン弾圧に繋がったことはよく知られているが、序列の厳しい共産党組織にあって領袖(文革期、領袖は神聖な言葉で毛沢東にだけ使われたという)²⁵⁾を崇拜しない黨員というのは、珍しかっただろう。領袖を崇拜しないということに関して、キリスト教の平等思想とともに、もう一つ考えられることがある。幼いころから王元化の家では、封建的な礼教を教え込まれたり、祖先を祭る祭祀が行われたりしたことはなかったというが、このような、中国の伝統的な礼教観念から自由な教育環境も、キリスト教精神とともに、王元化の心的傾向の形成に何らかの影響を与えたことだろう。

(2) 極左思潮下、党の文芸部門で働く

王元化は、1935年15歳のとき北平で起こった「12・9」反日学生運動に参加し、翌1936年には

「民族解放先鋒隊」に参加している。1937年7月の盧溝橋事件後上海に赴くが、上海に着くとすぐに「平津流亡学生会」の愛国運動に参加した。王元化は、十代のころから進んで愛国的民族解放運動に参加していた。両親は彼が理工系に進み将来外国に留学することを望んでいたというが、当時の上海は「孤島」となっており、大学は混乱していて専攻として選べる学科もなく、1937年、とりあえず大夏大学(華東師範大学の前身)に入学し経済学を専攻した。中国の伝統的な学問と西洋の進んだ学問を重視していた母は、彼に国学と英文学の家庭教師(大学教授)をつけ、国学では『説文解字』『莊子』『世説新語』等、英文学ではテニスンやコールリッジ等の英詩を学んだ。

1938年、王元化は中国共産党に入党、江蘇省委の文化委員会で仕事をすることになる。当時、孫冶方は文委の第一書記で、顧準は副書記だった。この頃から王元化は文学理論と作品の創作に従事するようになり、戦闘精神にあふれた文芸批評を書いている。19歳のときには「魯迅とニーチェ」を書き、ソ連の英文出版物『国際文学』に推賞されることとなった。また1930年代末に起こった新啓蒙運動にも参加、「抗戦文学の新啓蒙的意義」という文章を発表している²⁶⁾。1940年、上海の白色テロが日毎に激しさを増していた頃、王元化は地下党文芸工作委員会の委員となり、国民党文人と抗戦に反対する漢奸文人に向けて「民族の健康と文学の病態」という一文を書き、反動勢力の攻撃を受け、「孤島」における文芸論戦が巻き起こった。

抗戦勝利後、王元化は北平国立鉄道学院で講師を務め、学生たちに『文心雕龍』を講義した。1948年、彼は上海に呼びもどされ、『展望』週刊の主編者となった。国民党の統治を鋭く批判する何篇かの「時評」を書いたが、49年3月、『展望』は国民党に差し押さえられ、その後『地下文萃』の編集に携わった。中華人民共和国建国前後、彼はロマン・ロランに関する評論を書いてい

る。ロマン・ロランは若き日の王元化が傾倒した作家である。建国後の初期、王元化は共産党華東局宣伝部で仕事をし、後に新文芸出版社の総編集長兼副社長に就任、上海文芸工作委員会文学研究所所長及び出版局と上海市作家協会の二つの党組織のメンバーとなった。このように、王元化は20代から30代前半にかけて一貫して党の文芸部門で働き、主に評論を書いたり、雑誌の編集に携わったりしていた。

(3) 苦難の中での読書と執筆

1955年王元化は、反「胡風反革命集団」運動に連座し、胡風集団の一員とされ、隔離審査を受けた。過酷な隔離審査によって精神に異常をきたしたという。2年間にわたる隔離審査が終わっても結論は出なかった。これは、審査によっても王元化に歴史的・政治的問題は見つからなかったが、王元化が胡風は反革命だと認めなかったため、反抗的であるとされ隔離され続けたのだという。1960年に至ると反右派闘争を経て極左思潮はより激しくなり、彼は終に「胡風反革命分子」と断罪され、党籍を剥奪された。

隔離を引き延ばされた時から王元化は再三読書の要求を提出し、それがついに許可された。後に「一生の中であれほど思想を集中し心を専一にして読書したことはない」と述懐しているほど、この時期に集中して読書をしたという²⁷⁾。その範囲は、『毛沢東選集』からレーニンの原著、マルクス・エンゲルスの哲学的著作、さらに『資本論』（第一巻）、ヘーゲルの『小論理学』、『シェイクスピア戯曲集』に及び、読みながらノートに書き付け、整理して文章にする時を待っていた。この時期の、王元化に「靈魂の拷問」と言わしめた隔離審査によって、それまで「素晴らしいものとして信奉してきた神聖なものが、瞬時にして崩壊し、空しく跡形もなくなった」²⁸⁾。この危機の中で王元化は、それまでの価値観と倫理観の検討を迫られ、膨大な読書を通して、後述する「反思」を行なうことになる。王元化は後に「身体的自由

を失った環境の中で、思想の自由による大歓喜を享受できるとは、まったく夢にも思っていなかった」と述懐している²⁹⁾。

文革期になると、「文化大革命を悪辣に攻撃する」話を講じたとして、胡風事件を含めて「歴史的及び現行の反革命」と断罪された。1970年から72年にかけて再度の隔離審査を受け、その後、上海近郊の奉賢農場での労働改造に送られたが、この間に二度目の心因性精神病にかかったという。1960年、王元化は上海市作家協会文学研究所勤務を命じられ、このとき『文心雕龍』を研究対象とし、関連する論考を執筆し続けた。文革中、『文心雕龍』の原稿は持ち去られたが、文革後、幸いにも手元にもどってきた。1956年以來の「胡風反革命分子」のレッテルは、23年後の1979年に至ってようやく除かれたという。

文革期、王元化は『文心雕龍』のほかに、1975年から76年にかけて「韓非論稿」という長編の論文を書いている。文革末期の当時は、「四人組」を中心に「評法批儒」という運動が展開されており、韓非は法家を大成した人物ということになっていた。王元化はこれに疑問を呈し、法家と韓非は異なり、韓非が建てた「太平の世」は重苦しく陰鬱な社会で、「結託して反乱を起こそうとしたと嫌疑をかけられる恐れがあるので、人民は互いに往来もできず」、「君主の言葉がすなわち法令なので」、「法令の言葉を繰り返す以外、愚者は敢えて言わず、智者は是非を言うこともない」と書いた³⁰⁾。これは当時発表できるわけもなく、王元化は原稿を数人の限られた友人に見せただけだが、ある友人はこれを読んで大変驚き、「彼の韓非に対する批判は、当時の評法批儒運動に対する『当てこすり攻撃』の疑いがあり、これを発表したら一族すべてに災いが及ぶ」と思ったという³¹⁾。この論文は1980年に発表された。

王元化はさらに1977年には「龔自珍思想筆談」を書いている。この年には文革は既に終わっていたが、まだ「すべて派」が主導権を握っていた時

期で、王元化自身もまだ名誉回復されていなかった。この文章を書いたのは、やはり「文革」末期の評法批儒運動の中で、龔自珍が法家として尊ばれたからだという。このように現実の政治闘争のために古人を利用することは中国では珍しくなかったが、王元化は学者として「歴史上の人物の身から歴史の塵や芥を取り除き、本来の姿に戻るのが学者の仕事だと考え」、「政治が学術に押し付ける虚偽が許せ」ず、また「極めて率直で曲学阿世ならぬ龔自珍に、人を震わせ感動させる力を見て」、龔自珍論を書いたという³²⁾。この中で王元化は、封建的な束縛を突き破り、個性の解放を訴えた龔自珍の強靱な批判精神を強調している。

王元化の「韓非論稿」と「龔自珍思想筆談」を、文革末期の評法批儒運動との関連で読み解くと、たいへん興味深い。中国の歴史では人物の評価が時代によって目まぐるしく変わり、それは今なお続いている。とくに文革期の、歴史的人物に対する評価は、「あてこすり史学」によっておどろくほど曲解され歪曲された。そういう現実であって、王元化は迫害されながらひそかに現実批判の論考を書いていた。迫害の中で書き続け、今は発表できないが、「歴史の証人として」後世の審判に向けて書き残すという精神は、後述する顧準の文革中の姿勢とも重なり、中国の知識人の一つの伝統になっている。迫害の中で書き続け後世に残すといえ、やはり司馬遷が思い出される。王元化は80年代になって大学院生の指導にあたるようになるが、その頃学生たちに、しばしば自分の隔離審査時の心境を語っていた。苦難に満ちた時期に彼が最も身にしみて感じた歴史上の人物は司馬遷だったという。司馬遷が屈辱的な宮刑を受けてもなお生きながらえたのはなぜか、このことについて王元化は「彼は人格の尊厳と生命の尊さを真に理解しており、人間の精神的存在の意義を生命の存在の意義より高く見ていた。彼は文化を生み出す人格の力を何にも替えがたい崇高な地位に置いていたからこそ、逆境に勝ち、屈辱に勝

ち、人生最大の不幸に勝った」と語っていたという³³⁾。

(4)「反思」を通して自分の思想を客観視

王元化は、自分の思想に対する「反思」（過去を振り返り、検討すること）を生涯に3回行っていると書いている³⁴⁾。1回目は1940年前後、2回目は1956年頃、3回目は1990年代だという。彼の「反思」の中で特に興味深いのは、胡風事件から文革期にわたって彼自身が受けた度重なる苦しみから、極左路線の害悪を認識し、このことから自分自身への反省を含めて深く考えを進めたことである。たとえば彼が19歳の時に書いた「魯迅とニーチェ」は当時賞賛されたが、あれは「左」傾思潮の影響を強く受け、機械論的な痕跡があると言っている。また、建国後の初期、文芸界を支配していたソ連の理論モデルの影響から抜け出しておらず、自分のいくつかの文章には西欧現代文化を否定する過激な感情が流れており、さらにその後、『武訓伝』批判や胡風批判の文章を書いたりしたが、これらは党の組織原則に対する彼の忠誠心と極左思潮の影響が混ざり合っているという。これは一種の自己批判であるが、もちろんいわゆる強いられた「自己批判」ではない。王元化は1988年、「样板戲」（現代革命模範劇）について書いた文章の中で、次のように書いている。

当時のあのような雰囲気（極左思潮や教条主義をさす—引用者注）の下での作品は、歴史の風雨に耐えてなお生命力を維持できるだろうか。私は認めなければならない、1952年に出版した『真実に向かって』は当時異端であると批判され、20年余り販売禁止となっていた。その後名誉回復され改めて世に出た後、私は再び目を通したが、その中の少なからぬ段落や章節は読み終えることができなかった。自分が受けた無念は公正に対処されるべきだが、不公正な扱いを受けた作品に自分自身が向き合う際にも、实事求是の態度で臨ま

なければならない。作品は、世に出た後は読者のものであり、社会全体のものであるからである。著作者はいかなる状況下であっても、芸術的公正さを失ってはならないのだ³⁵⁾。

自分の若書きの作品に対して「歴史の風雨に耐えてなお生命力を維持できるか」と問うことができる作家がどれほどいるだろうか。王元化は、作品は世に出た後は読者や社会のものになる。だから作者自身も、作品を自分から独立したものとして客観視し、評価しなければならないという。彼は極左思潮や教条主義路線の害悪を繰り返し批判しているが、それはそれとして、その影響を受けて書いた、書くという行為を選びとったのは他ならぬ自分自身であり、その責任は免れえないとする。ここには責任を他に転嫁しない、真の意味の主体性があり、王元化の矜持が現われていると思う。また、自分の作品をも客観的に見つめ歴史の検証を受けようとする姿勢には、文革期に韓非子や龔自珍を論じ歴史の証人たろうとした王元化と同じ厳正な歴史家の眼がある。いつの時代にも、他者を責め、批判することにばかり血眼になる人間が多い中、このような精神は極めて貴重であろう。

(5) 独立の人格、独立の見解

1979年の名誉回復後1983年までの数年の間に、王元化は6冊の著書を出版している。その中の『文学沈思録』は1976年から1982年までに書いたほとんどの文章を取録しており、3年間に3版まで出している。「『文学沈思録』が文芸理論の一連の重大問題に提起した創見は人々の注目を集め」「王元化は、古代文論以外の美学・文芸学・思想史等の領域で名声を得た」という³⁶⁾。その後王元化は「文化学」の研究を始め、中国伝統文化の思考方式などを含めた幅広い研究を進めるようになる。

1981年、王元化は国務院が創設したばかりの学

位委員会学科評議員に選出された。この評議員制度は、中国が大学院生の教育と学位授与を再開し、人材の育成を始めたということだけでなく、専門のレベルの評価等の権利を、行政機関の長や専門外の官僚によらず、学術的な権威と専門家に任せたとすることを示し、重要な意味を持っているという。この時王元化とともに選ばれた呂叔湘、王力、朱東潤、錢鐘書など当時最高の碩学たちは、61歳の王元化より10歳から20歳年長であった。

1982年、王元化は党の第十二回党大会の代表に選ばれ、その後党の上海市委員会宣伝部長に選ばれた。彼は学問への専念などいくつかの理由を挙げて固辞したが、過渡期のこの時期、若手の育成を頼まれ、引き受けることになったという。当時の上海は、「四人組」の残党勢力が完全には払拭されておらず、党中央は上海の党人事を重視していたという。王元化の選出はそのことと関係があるようである。しかしこの宣伝部長時代に、83年の「マルクス死去100周年記念学術報告会」の周揚講演の起草に関わり、さらにその後の「反精神汚染」運動に遭遇することになり、結局この職務は2年ほどでやめている。

「八十年代」中後期の思想・文化状況を踏まえて、王元化は次のように書いている。

学術の領域にも新陳代謝の問題がある。しかし新しくするという事は新奇を求めることではない。(中略)思想史上にも多くの新しい流派があり、さながら旋風が次から次へと巻き起こっているが如くである。近來理論界の新説はこのように生まれては消えるを繰り返しており、ある人はこのような状況を冗談めかして「各々風騷を領す三五天(思想界をリードする新説がごく短期間現れては消える)」と言っている³⁷⁾。(1984年)

私はこのような蜂の巣をつつくように騒ぎ立てる風潮が恐ろしく、反感を持っている。私

は我々がみな独立した見解を保ち、「学問をするに、時流に媚びず」、権勢に阿らず、凡庸な多数に諂わず、自分が賛成していない一時的な潮流に乗らないようにと望む。こうしてこそ、我々は健康的な文化、真の文化をもつことができるだろう³⁸⁾。(1988年)

「八十年代」半ばからいわゆる「文化熱（文化ブーム）」が起り、欧米の様々な思想や観念が次々と紹介されるようになった。王元化は「私は『文化熱』という言い方はあまり好きではない。容易に熱くなるのは、また往々にして冷めるのも早いからである」³⁹⁾と、新奇を求め、生まれては消える流行を追って騒ぎ立てる風潮を憂慮し、学問は一步一步堅実に進めるべきことを訴えていた。一方、文革後10年が過ぎた「八十年代」末までに、改革開放初期の「实事求是」「思想解放」の理念は遠のき、当局は「ブルジョア自由化反対」の名の下に、知識人に対する言論弾圧を繰り返してきた。王元化はこの時期の知識人のあり方を改めて問い直すように、次のように訴えている。

中国の知識人は、長きにわたった伝統的な従属的地位を脱却し、自我を取り戻し、独立の人格を持ち、それによって独立の意識と独立の見解を形成しなければならない。知識を尊重し、人材を尊重する、まずこの点に注意しなければならない。二度と「皮がなくなったら毛はいったいどこに付くのか」の考え方を使ったり、中国の知識人を寄生的或いは従属的な地位に置いたりしてはならない⁴⁰⁾。(1987年)

私は、思想家や作家の、政治への参画意識及び時代に対する使命感と責任感、独立した人格と独立した見解の喪失を意味するわけではなく、芸術性を放棄することや弱めることにもならないと考えている。近年、一種の反

参画意識が現れ、それは、社会生活を離れ、学術のための学術や芸術のための芸術という態度をとることこそ、学術や芸術を正しい観点に導くと考えているが、これは角を矯めて牛を殺すような偏った考え方である⁴¹⁾。(1987年)

ここには、「八十年代」末期、『新啓蒙』叢書を創刊する直前の、王元化の思想的境地在が表現されている。「八十年代」になっても繰り返される言論抑圧の下、知識人の「独立の人格」「独立の意識」を訴え、一方では「蜂の巣をつつくように」群れをなして一時的な潮流に乗る風潮を大変憂慮している。学問は「権勢に阿らず、時流に諂わず」一人一人が「独立した意識」で進めるべきであるという。しかしかといって、現実の社会から逃避し書齋に籠って「学術のための学術」や「芸術のための芸術」を旨とする傾向にも反対している。これは、学者として厳格な姿勢を保ちながら、思想家として「時代に対する使命感と責任感」を果たそうとする王元化の、知識人としての生き方を示しているといえるだろう。そして王元化のこの姿勢が、『新啓蒙』叢書の刊行につながっていく。

2. 『新啓蒙』叢書の志

(1) 権勢に屈せず、世に媚びず

『新啓蒙』叢書は、上述のように1988年10月から1989年4月まで4号刊行され、誌上には編集長（主編者）の名前だけを載せているが、編集委員会に類するものはあって随時開かれていたようである。第1号が発行された後の88年10月26日付けで、王元化の弟子の呉琦幸は次のように記している。

桂林路の上海師範大学で『新啓蒙』の編集討論会が開かれた。これは『新啓蒙』の文芸サロンといってもよいだろう。この会は王元化

が主宰し、出席者は、于光遠・戈揚・李洪林・馮媛・張顯揚・阮銘・阮若瑛・高爾泰・浦小雨・金觀濤・魏承思・黃万盛・包遵信等であった。(中略)この人たちは、王元化先生と志を同じくする友人たちである。会議では、この雑誌のことや、現在の理論界・思想界について、テーマも設けず発言も指定せずに、自由に語り合った。総じて、知識人を対象にして理論研究を主軸とした学術的な刊行物にしようという話であり、世俗に阿らず、時流に乗らず、独立思考を旨とし、適度に控えめで、長期的な作用を目指そうという話であった⁴²⁾。

ここに名前が出ていない童大林・王若水・李銳・黎澍を含め、編集委員や執筆者の多くは、改革開放初期に胡耀邦周辺で活躍した党内理論派であった。彼らは文革後のイデオロギーの変革及び改革開放政策の策定に力を尽くし、後に保守派によって批判されたり、党を除名されたりした人々である。執筆者の中にはこのような党内理論派以外の学者や若手研究者もいたが、これだけ胡耀邦周辺の党内理論家が揃っていることはやはり注目すべきだろう。この中の王若水は、「反精神汚染」の引き金になった、1983年3月の「マルクス死去100周年記念学術報告会」で周揚が報告した論文の起草者として、王元化及び顧驥とともに仕事をした人である⁴³⁾。

この叢書にはとくに「発刊の辞」の類いはないが、王元化の筆になる編集後記から、叢書の志のようなものを読み取ることができる。

我々が編集出版するこの小さな叢書は、立派な目標も壮大な抱負もない。ただ、娯楽性の強いその場限りの読物が、質の高い真面目な読物を急速に駆逐しつつある現在、学術の雰囲気を活気づけ、理論の進展を進めるためにいくばくかの仕事をしたいと考えているだけ

である。(中略)

理論の生命は勇敢と誠実、権勢に屈せず、世に媚びないことにある。ここに発表する文章は必ずしも高い水準ではないかもしれないが、我々にはできるだけ真剣に学び、身をもって会得した、創見のある、新しい領域の開拓や探索に努め、一切の空論・虚偽・大風呂敷を断固として排除する。探求の過程で過ちを犯すかもしれないが、それは能力に限りがあるからで、学術研究以外の動機によるものではなく、我々自身の学術的良心に悖るものでもない⁴⁴⁾。

「娯楽性の強いその場限りの読物が……」のように、商業主義によって文化の質が落ちていることに対する危惧を、王元化は他のところでもしばしば語っている⁴⁵⁾。これは改革開放後の拝金主義の風潮が、学術や文化の発展を阻害しかねないことへの深い憂慮を示しているようである。「学術の雰囲気を活気づけ、理論の進展を図る」「学術研究以外の動機によるものではなく、学術的良心に悖るものでもない」と何度も学術的な研究を強調していることも印象的である。これは、彼が学術的な研究を重視していたことは勿論だが、胡風冤罪事件に連座し、文革でも迫害された王元化が、慎重に政治との距離をとろうとしていたことを示しているようにも思われる。

この中の「理論の生命は勇敢と誠実、権勢に屈せず、世に媚びないことにある」という部分について、李洪林は「これは中共政権下においてこれまでいかなる出版物も言ったことがなく、また口に出すのは不可能な言葉である」と書いている⁴⁶⁾。80年代末になっても、こういうことはそう簡単に口にはできない言葉であったということ、私たちはやはり知っておくべきだろう。

(2) 埋れた中から光輝く文章を発掘

『新啓蒙』の編集後記には、もう一箇所非常に印象深い記述がある。それは当時一般にはほとん

ど知られていなかった思想家顧準の文章を「発掘」し⁴⁷⁾、叢書上に掲載した時の編集後記である。

彼はこの文章と未発表の大量の文章を文革期に書いた。厳密に言えば、それらは発表するつもりで書かれたものではなく（当時そのような条件はなかったので）、弟の陳敏之への手紙である。顧準は早くから革命に参加しているが、非常に不運であった。困窮し流浪する暗澹とした生活の中で、二十年以上にわたる悲惨な生涯を送り、文革中に亡くなった。編者は彼の大量の遺稿を読み、彼が十数年前に閉じられた環境の中で書いたこれらの見識ある文章に接して、驚きと敬服の念を抱かずにはいられなかった。とりわけ民主の問題を論じた一連の文章中のいくつかの観点は、今日から見ても先進的な卓見といえるだろう⁴⁸⁾。

ここで顧準の文章として紹介されているのは、「ギリシャ思想と史官文化」という短い文章である。これは、西欧の科学と民主主義の源流はギリシャ文化にあるとして、民主を尊ぶギリシャで科学思想が発達し、中国古代以来の史官文化は、民主も科学も生み出さなかったと言っている⁴⁹⁾。ここで、編者の王元化が顧準の文革中に書いた文章を「発掘」し公表したことの背後に、私たちは様々な意味や思いを読み取ることができる。上述のように王元化自身が顧準と同様に文革以前から文革まで迫害され、その迫害の中で、当時の「評法批儒」運動で歪曲された歴史上の人物、韓非子と龔自珍の評価を糾す文章を「発表するあてもなく」ひそかに書いていた。また彼は文革中に書いた『文心雕龍』を論じた文章を押収されたが、幸運にもその後手元に戻り発表することができたという体験を持っている。

中国の長い歴史の中では、ものを書く知識人の筆禍事件は無数に起こっており、それはかつての

封建社会はもちろん、新中国成立後の共産党政権下ではより過酷になり、この叢書が出された「八十年代」も、さらには現代もなお続いている。そのような中国では知識人たちは、たとえ生きているうちに発表することができなくとも、いつの日か価値を見出され、歴史の上に記載されることに希望を見出すというある種の「歴史意識」を持っているようである。叢書に顧準の文章を載せただけでなく、編集後記にこのような紹介を書いた王元化の中に、中国の知識人の伝統的な「歴史意識」を見る思いがする。王元化はさらに次のように読者に呼びかけている。

顧準のような人は決して孤立した現象ではない。我々は将来きっとさらに多くの胸を打つ事例が世に出るだろうと信じている。ほこりに埋もれた中からさらに多くの光輝く文章を発掘し、それらを世に公開し、読者とともに読む喜びを分かちあえたら、編者として大変光栄に思う⁵⁰⁾。

「ほこりに埋もれた中から光輝く文章を発掘・公開し、読者とともに喜びを分かち合う」ことこそ、この叢書の志であったのではないか。しかし残念なことに、これを書いた数か月後、『新啓蒙』叢書自身が第二次天安門事件後の言論弾圧により停刊を命じられてしまう。しかし書き残されたこの文章によって、私たちは『新啓蒙』叢書の志と後世へのメッセージを受け取ることができるのである。

おわりに

「八十年代」の改革開放は、「文革」への「反思」に基づく「思想の解放」から始まった。そして「新啓蒙」の原点も「思想の解放」そして「独立思考」であった。王元化は折に触れ「独立意識」「独立思考」を訴えているが、これは彼の「権勢に阿らず、時流に乗らず」という主張と表

裏一体を成している。経済改革の進展に伴って、中国社会は経済効率第一の風潮が蔓延し、文化の質はなかなか向上しなかった。80年代半ばから「文化ブーム」ともて囃されるほど文化論が流行したが、一方で「文盲率は驚くほど高い」と1989年の時点で王元化は書いている⁵¹⁾。「文化ブーム」は「熱しやすく冷めやすい」と批判し、地道に文化的なレベルをあげるのではなく時流に乗って騒ぎ立てる傾向をとくに憂慮していた。王元化の嘆きは、体制側の経済優先政策のみならず、それにしたがって流れていく中国社会の「一窩蜂」（蜂の巣をつつくような騒ぎ）という傾向にも向かっていた。時流に乗って容易に流れていく世相に抗して文化レベルの向上を願っていたのが『新啓蒙』叢書であった。それを理論の面から検討すると言っていたが、根底には改革開放で歪んでいく中国社会を文化的に立て直すというねらいがあったのではないかと考えられる。

本論文では王元化の思想と『新啓蒙』の志を中心に論じてきたが、『新啓蒙』叢書では具体的にどのような問題が論じられたのだろうか。今後はその点を中心に研究を進めていく予定である。

注

- 1) 王学典『思想史上的新啓蒙時代 黎澍及其探索的問題』河南人民出版社, 2010年, 2頁。
- 2) 「毛沢東は、スターリンなど通常の全体主義統治者とも異なる。通常の全体主義統治者は、人民の身体しか統治しない。(中略)ところが毛沢東は思想の改造を求めた。(中略)彼が望んだのは、人の精神をコントロールし、人心を征服し、人の思想に影響を与え、改造し、専政を人の脳まで浸透させ、脳内で現実化することであった。しかもそのための系統的な制度と方法まで作り上げた。これは大変な、恐るべきことで、空前のことであった。」(錢理群著、阿部幹雄他訳『毛沢東と中国 ある知識人による中華人民共和国史(上)』青土社, 2012年, 26-27頁)。また李銳も同様のことを語っている(李銳著、小島晋治編訳『中国民主改革派の主張 中国共産党私史』岩波現代文庫, 2013年, 99-100頁)。
- 3) 毛沢東の死後、華国鋒は毛沢東路線の継承者を自任し、「毛主席の決定したことはすべて断固として守らなければならない、毛主席の下した指示はすべて変わることなく守らなければならない」という「二つのすべて」を提唱した。この華国鋒の提唱を支持し、文革後の政権を担当し続けようとした党内保守派グループのこと。
- 4) 「『歴史決議』の採択によって党中央としては、毛沢東時代および毛沢東個人の功罪の評価について、一つの区切りをつけた。しかし、一般党員、民衆のレベルではさまざまな意見が『思想の解放』の呼びかけの中で登場していた。その一つがいわゆる『信念の危機』である。この表現を最初に用いたのは、郭羅基『いわゆる“信念の危機”を評す』(上海『文匯報』80年1月13日)である。彼によれば、『信念の危機』は林彪・『四人組』時代に『現代の迷信を基礎として確立されていた信念が崩壊した』結果として生まれたものであった。」(宇野重昭・小林弘二・矢吹晋『現代中国の歴史1949~1985 毛沢東時代から鄧小平時代へ』有斐閣, 1986年, 377頁)。
- 5) 「我々は11期三中全会以後の思想解放運動を『新啓蒙』と呼んでいる。この思想啓蒙は『五四』の啓蒙運動を継承するだけでなく、さらに深化させることにはかならない。」(馬国川『我与八十年代』生活・読書・新知三聯書店, 2011年, 16頁。この本は、ジャーナリストの馬国川が八十年代に活躍した王元化・李沢厚・劉再復等12人にインタビューした記録を収めており、上記の言葉は王元化自身が語った言葉である)。なお、中国近現代史上「新啓蒙」運動が行われた時期がもう一つある。それは1930年代末、共産党主導により民主党派も含めた抗日救国の文化運動として展開された。(注26を参照)
- 6) 馬国川 前掲書, 16頁。
- 7) 同上。
- 8) 「八十年代」啓蒙思潮に関する著書や論文としては、管見では以下のようなものがある。

許紀霖・羅崗等著『啓蒙的自我瓦解 1990年代以来中国思想文化界重大論争研究』吉林出版集团有限责任公司, 2007年。

王学典『思想史上的新啓蒙時代 黎澍及其探索的問題』河南人民出版社, 2010年。

賀桂梅『「新啓蒙」知識档案 80年代中国文化研究』北京大学出版社, 2010年。

- 郭羅基『新啓蒙 歴史的見證與省思』晨鐘書局，2010年。
- 朱志榮『新時期中國知識分子研究』秀威資訊科技股份有限公司，2010年。
- 許紀霖『当代中国的啓蒙与反啓蒙』社会科学文献出版社，2011年。
- 梁鴻『新啓蒙話語建構「受活」与1990年代以来的文学和社会』中国社会科学出版社，2012年。
- 汪暉「当代中国的思想状况与現代性問題」，許紀霖主編『二十世紀中国思想史論』上卷，東方出版中心，2000年。なおこの論文には、日本語訳がある。
- 村田雄二郎・砂山幸雄・小野寺史郎訳『思想空間としての現代中国』岩波書店，2006年に収められている。
- 譚仁岸「思想空間としての『八十年代』：『新啓蒙』思潮の諸相と現代中国」（一橋大学博士学位申請論文，2014年）。
- 「八十年代」の回顧録の類いとしては以下のようなものがある。
- 查建英『八十年代訪談録』生活・読書・新知三聯書店，2006年。
- 馬国川『我与八十年代』生活・読書・新知三聯書店，2011年。
- 王学典『懷念八十年代』広東人民出版社，2015年。
- これらの中では、朱志榮の著書が『新啓蒙』叢書及び王元化について比較的詳しく書いている。朱志榮，前掲書，105-126頁。
- 9) 王学典 前掲書，25頁。
- 10) 許紀霖（1957～）と王学典（1956～）は同世代人で、経歴も似ている。ともに10代の少年期に文革期を過ごし、文革終焉後大学に入学（許，1977年華東師範大学政治教育学部。王，1979年山東大学歴史学部）。現在、許は華東師範大学教授、華東師範大学現代思想文化研究所常務副所長。主に20世紀中国思想史と知識人の研究に従事。王は山東大学教授、山東大学儒学研究院常務副院長兼雑誌『文史哲』の主編者。主に史学理論と史学史、中国現代史学思想及び思潮の研究に従事。二人の「八十年代」啓蒙運動に対する評価の仕方の違いは、文革とマルクス主義に対する姿勢の違いに起因しているように思われる。
- 11) 許紀霖・羅崗等 前掲書，7-8頁。
- 12) 同上，6頁。
- 13) 王学典 前掲書，23頁。
- 14) ここで王学典が「三大叢書編集委員会」と言っているのは、許紀霖が『自我瓦解』で「80年代の新啓蒙運動の中で三つの民間の文化學術団体が重要な役割を演じた。『走向未来』と『文化：中国与世界』叢書編集委員会，そして中国文化書院である」（許紀霖・羅崗等著，前掲書，6頁）と書いていることを指す。そして「四大叢書編集委員会」とは、許紀霖のいう「三大叢書編集委員会」に王学典が『新啓蒙』叢書編集委員会を加えて名付けたものだろう。『走向未来』叢書は金観涛を主編者として、自然科学・社会科学・芸術文化等幅広い領域の作品を数多く紹介し、特に西欧の科学哲学や科学方法論の紹介により“科学派”と見做されることもある。『文化：中国与世界』叢書は“人文主義”を掲げ、甘陽を主編者として、西欧の古典から現代に至る人文主義思潮を紹介した。『中国文化書院』は、湯一介・李沢厚らが中心になって、中国伝統文化に対する温厚な保守主義を掲げ、通信教育や文化講習会、出版物等を通して啓蒙活動を展開した。
- 15) 王学典 前掲書，16頁。
- 16) 同上，24-25頁。
- 17) 同上，15頁，25頁。
- 18) 同上，2頁。
- 19) 上海の『世界經濟導報』を中心に、「球籍（地球の一員）」危機に関する討論を提起、改革を深化させなければ、中国は「球籍」を剥奪されかねず、国民は危機意識を持たねばならないと訴えた。
- 20) 『河殤』を趙紫陽は賞賛、保守派の一部は「共産党を無視している」と批判した。第二次天安門事件後、主要メディアは趙紫陽を批判するとともに、この番組を攻撃、ブルジョア自由化を宣伝し、虚無主義の典型であるとして、再放送を禁止した。
- 21) 吳琦幸『王元化談話録1986-2008』上海人民出版社，2015年，192頁。
- 22) 同上，217頁。
- 23) 王元化の経歴と思想については、胡曉明「伝略」（『王元化集 卷十附卷』湖北教育出版社，2007年）及び吳曉卓「走自己的路—記王元化教授」（吳琦幸，前掲書）を参考にした。
- 24) 胡曉明，前掲論文，16-17頁。
- 25) 余華『十个詞彙里的中国』麥田出版，2010年，33頁。
- 26) 1930年代の「新啓蒙運動」は、一般的には陳伯達

の論文「哲学的国防動員—新哲学者の自己批判和関于新啓蒙運動の建議」(1936年9月10日『読書生活』第4巻第9期)の発表に始まるとされている。その後、37年から39年にかけて艾思奇・何干之等が盛んに文章を発表したり討論会が開かれたりして運動は盛り上がったが、1940年には急速に衰退した。その原因は、運動の担い手たちが抗日運動のため各地に派遣されたことや共産党と国民党の関係の悪化などいろいろあったが、最大の原因は1940年1月の毛沢東による「新民主主義論」の提唱だったようである。「新民主主義論」発表後、「五四」の個性解放と思想の自由を原則とする啓蒙精神は、共産党の批判の対象となった。王元化は1938年の「抗戦文学の新啓蒙的意義」発表後のことを50年後に次のように書いている。「その後、新啓蒙という言い方を二度と使ってはならないという通知を受け取った。こうして始まって間もない新啓蒙運動は挫折した。今に至るも何が原因なのかわからない。党史資料を調べればその答えが見つかるかもしれない。いずれにしろ、抗日戦争前後に理論界が啓蒙の旗印を掲げたというのは事実である」(王元化「為五四精神一辯」『新啓蒙』叢書第1巻、1988年、11頁)。「新啓蒙という言い方を使うな」という通知や、陳伯達のその後の党内での位置などから、30年代の新啓蒙運動は、ある時期共産党内では一種のタブーであったようである。

- 27) 『王元化集』総序2006年、3頁。日本語訳は、岡村繁主編『思辨隨筆 王元化著作集第二巻』汲古書院、2008年、467頁。訳出の際は部分的に日本語訳を参照した(以下同じ)。なお、王元化の日本語訳著作集は全三巻である。いずれも岡村繁主編、汲古書院発行で、『文心雕龍講疏 王元化著作集第一巻』2005年(『文心雕龍講疏』上海古籍出版社、1992年、の日本語訳)、『思辨隨筆 王元化著作集第二巻』2008年(『思辨隨筆』上海文芸出版社、1994年、の日本語訳)、『九十年代の反思録 王元化著作集第三巻』2010年(『九十年代反思録』上海古籍出版社、2000年、の日本語訳)。
- 28) 『王元化集』、2頁、日本語訳『思辨隨筆』466頁。
- 29) 同上、5頁、同上469頁。
- 30) 「韓非論」『王元化集 卷六思想』、30頁。
- 31) 胡曉明 前掲論文、59頁。
- 32) 同上、60頁。
- 33) 胡曉明 前掲論文、73-74頁。
- 34) 『王元化集』総序、1-10頁。日本語訳前掲書『思辨隨筆』463-474頁。
- 35) 「論样板戲」『王元化集 卷二文芸評論』、207、208頁。
- 36) 吳曉卓 前掲論文、130頁、132頁。
- 37) 『王元化集 卷五思辨録』、542頁、日本語訳『思辨隨筆』、331頁。
- 38) 同上 591頁、同上、130頁。
- 39) 『王元化集 卷六思想』、116頁。
- 40) 『王元化集 卷五思辨録』、85頁、日本語訳『思辨隨筆』、51頁。
- 41) 同上、76頁、同上、53頁。
- 42) 吳琦幸、前掲書、193-194頁。
- 43) 「マルクス死去100周年記念学術報告会」における周揚発表論文の起草の経緯については、王元化「為周揚起草文章始末」(『王元化集 卷七隨筆』、296-302頁)に詳しい記述がある。
- 44) 『新啓蒙』第1号、編集後記。
- 45) 「社会の商売ブームが学校の中にまで入ってきた。私は最近大変憂慮している。このような国民あげての商売への意気込みはまるで組織的な運動をしているようである。(略)私はこの問題を重視すべきだと何回も関係方面に呼びかけてきた。文化は下降し、精神生活は墮落し、国家に齎す損害はなかなか埋められない。『文革』は学生たちを政治運動に巻き込んだが、現在は学生を商売の大波に巻き込んでいる。」(吳琦幸、前掲書、81頁)。
- 46) 李洪林『中国思想運動史 1949-1989』修訂版、天地圖書有限公司、2010年、485頁。
- 47) 顧準(1915~1974)は上海の小商人の家に生まれ、独学で会計学を修め、1930年代に若くして会計学の権威となる。1935年中国共産党入党、1949年上海市財政局局長兼税務局長等を務める。1952年の三反運動で党内外の一切の職務を解かれる。1956年経済研究所の研究員となり、計画経済体制下において商品貨幣関係と価値規則を完全に消滅させることは根本的に不可能であることを指摘し、社会主義条件下での市場経済理論を中国で最初に提起した。1957年及び1964年の二度「右派分子」とされる。1962年からの下放労働を経て、経済研究所に戻る。文化大革命では肉体的にも精神的にも更に残酷な迫害を受ける。様々な非人間的な迫害を受けながら、顧準は独

立思考を堅持、特に民主の問題に注目し、「ギリシャ都市国家制度」「理想主義から経験主義へ」を書く。1974年肺癌により59歳で死去。1980年名誉回復。その後顧準の遺稿（弟、陳敏之の写本）はひそかに読まれていく。1982年、『ギリシャ都市国家制度』が出版され、学术界は「我が国における都市国家史を切り開いた」と称賛した。1989年陳敏之と王元化の奔走により『理想主義から経験主義へ』が香港の三聯書店から出版される。1994年『顧準文集』、1997年『顧準日記』が出版され、その後、中国の知識界・思想界では「顧準旋風」が起こる。顧準の名が広く知られるようになったのは90年代の『顧準文集』出版以降のようであるから、1988年に『新啓蒙』誌上で顧準を紹介し、「ギリシャ思想と史官文化」を掲載した王元化は、ある意味で顧準を「発掘」したといえるだろう。

- 48) 『新啓蒙』第2号、編集後記。
 49) 顧準「希臘思想与史官文化」『新啓蒙』第2号、76-81頁。
 50) 『新啓蒙』第2号、編集後記。
 51) 『王元化集 卷五思辨録』、38頁。日本語訳『思辨随筆』、27頁。

引用文献

王学典『思想史上的新啓蒙時代 黎澍及其探索的問題』河南人民出版社、2010年。

許紀霖・羅崗等著『啓蒙的自我瓦解 1990年代以来中国思想文化界重大論争研究』吉林出版 集团有限责任公司、2007年。

王元化主編『新啓蒙』叢書 湖南教育出版社、第1・第2号、1988年、第3・第4号、1989年。

『王元化集 卷二文芸評論』湖北教育出版社、2007年。

『王元化集 卷五思辨録』同上。

『王元化集 卷六思想』同上。

『王元化集 卷七隨筆』同上。

『王元化集 卷十附卷』同上。

吳琦幸『王元化談話録1986-2008』上海人民出版社、2015年。

馬国川『我与八十年代』生活・讀書・新知三聯書店、2011年。

李洪林『中国思想運動史 1949-1989』修訂版 天地圖書有限公司、2010年。

余華『十個詞彙里的中国』麥田出版、2010年。

岡村繁主編『思辨隨筆 王元化著作集第二卷』汲古書院、2008年。

錢理群著、阿部幹雄他訳『毛沢東と中国 ある知識人による中華人民共和国史（上）』青土社、2012年。

李銳著、小島晋治編訳『中国民主改革派の主張 中国共産党私史』岩波現代文庫、2013年。

宇野重昭・小林弘二・矢吹晋『現代中国の歴史1949～1985 毛沢東時代から鄧小平時代へ』有斐閣、1986年。

